

書評：藤本大士『医学とキリスト教——日本におけるアメリカ・プロテスタントの医療宣教』法政大学出版社、2021年8月。

横井 謙斗¹

著者が2019年に提出した博士論文を元にして書かれた本書のテーマは、アメリカ医療宣教師の活動である。医療宣教師とは、医師として西洋医学の知識・技能を活用し、国内外にキリスト教を広げようとした宣教師らのことを指す。従来の医学史では、明治からアジア・太平洋戦争終戦までの日本医学はドイツから大きな影響を受けてきたと言われてきた。しかし実際には、明治期に来日したアメリカ人医師は他の西洋人医師の中でも最も多く、そのほとんどがプロテスタントの医療宣教師だったと言われている。本書は、幕末から終戦までに来日したアメリカ人医療宣教師を可能な限り全て取り上げることで全体像を提示し、彼ら彼女らの活動を包括的にまとめ上げた研究成果である。加えて本書は、医学史研究のみならず近年のミッション史研究も踏まえつつ、宣教師と現地人(日本人)との交渉過程を精緻に描くことが目指されている。

本書は、(1)1859年-1900年頃までの、日本における医療宣教の開始・発展・縮小の過程を描く部分(第1章-第3章)、(2)1880年代半ばから終戦時までの、医療宣教師らがどのような戦略により近代化しつつある日本の医学との差異化を図ったのかを描く部分(第4章-第7章)、(3)戦後に医療宣教が発展していく様子を示した部分(第8章-第9章)の3つに分かれる。そしてこれらの章を通じて、「アメリカ人医療宣教師は、ドイツからの影響が大きかった日本の医学界において、なぜ活動を続けることができたのか」、「アメリカ人医療宣教師は、日本において宣教が進んでいく中、なぜ医療活動に従事し続けたのか」という医学史・ミッション史におけるそれぞれの大きな問いが考察されていくことになる。以下、各章の内容を紹介する。

第1章では、1859年-1860年にかけて来日した3人の医療宣教師であるアメリカ長老教会のヘボン、アメリカ・オランダ改革派教会のシモンズ、アメリカ聖公会のシュミットという3人を取り上げ、彼らがドア・オープナーとして果

1 東京大学大学院総合文化研究科 Emai : yokoikento001@gmail.com

たした役割と、日本人医師に与えた影響が述べられる。アメリカプロテスタントは1859年から日本での宣教を開始したが、当時キリスト教は禁制下にあり抑圧されていた。そこで、彼らは医療宣教師を派遣し、病者への施療や日本人医師への医学教育を通じてキリスト教への偏見や警戒心を解こうとする間接的な伝道を行なった。ただし医療宣教師といっても、医療をあくまで道具として捉え本分は宣教活動であると考えていたヘボン、キリスト教の伝道よりも医学の探究に情熱を注いでいたシモンズ、医療と伝道を両立させようとしていたシュミットというように、自らの役割の力点をどこに置くかは各々異なっていたことが指摘される。一方、日本人医師らは西洋医学を学ぶために医療宣教師の周りに集まり、その中には医療宣教師の狙い通り結果としてクリスチャンになった者もいた。

第2章では、医療宣教が大いに栄えたとされる1870年代に来日した8人のアメリカ人医療宣教師の活動が分析される。1873年2月24日にキリシタン禁制の高札が撤去されたことで、アメリカの諸教派は日本宣教を活発化させた。1870年代に日本宣教を開始したミッション・教派の多くは医療事業を有効な宣教方法だと考えており、医療宣教師を大阪・神戸を中心に派遣した。また彼らには、在日宣教師の健康管理を行う役割も期待された。1870年代における医療宣教師らの活動の特徴は、彼らが居住地内だけではなくその近隣地域を巡回するようになったことである。そこでは日本人医師に医学が教授されただけでなく、医術開業試験の及第を目指す医学生にも臨床スキルが教授された。また1870年代の医療宣教師は、信者の獲得や教会の設立にも大きな役割を果たし、クリスチャンとなった日本人も、教会の設立だけではなく、牧師、執事、伝道師などとして教会の維持にも貢献した。

第3章では1880年代から1890年代にかけて、日本における医療宣教がいかに変化したかが論じられる。1880年代に入ると、日本における西洋医の数が急激に増えたことで、医学を学ぼうとする日本人は医療宣教師ではなく日本人医師に指導を求めるようになった。そのため、医療宣教師の間では、日本における医療宣教の意義が揺らいでいるとの見解が共有されるようになる。こうした中、ディサイプルス派のマックリンのように医療宣教が求められている中国へ異動しようとした者もいたが、1870年代から活動していた医療宣教師は、80年

代以降も医療宣教の意義を示そうとした。例えば、ベリーは「キリスト教的慈愛 (Christian humanity)」によってキリスト教への偏見を和らげるドア・オープナーから、「実践的慈愛 (practical humanity)」の担い手へという医療宣教の役割が変化したことを認め、キリスト教精神に基づく医療教育の提供や慈善医療の推進に取り組もうとした。

第4章では、1880年代から1890年代にかけて来日した全ての女性医療宣教師8人の活動が検討される。アメリカでは「女性のための女性の活動」のスローガンの下で1870年頃から女性医療宣教師への期待が高まり、1880年代以降日本においても女性医療宣教師がミッション・スクールの校医や診療所・病院で活躍するようになった。彼女らの中にはミッション側との意見の対立や日本人医師からの圧力によってやむを得ず活動を中止した者や、医療宣教を行う意義を見出せず自らの判断で活動を中止した者もいた一方で、一定の成果を残すことができた者もいた。その要因として、筆者は、(1)日本人女性をアメリカに留学させることなどを通じて日本人の協力を得ることができたこと、(2)日本では女性、子供の患者、貧困層の患者、精神疾患などへの医療宣教が未だ不十分であると訴え、その分野での医療宣教の意義を示したことを挙げている。

第5章では、1880年代から1890年代、1920年代から1930年代までの2つの時期に注目し、宣教看護婦の活動(看護教育・看護実践)が包括的に描かれる。クリミア戦争以降、アメリカ、イギリス、カナダなどで専門職としての看護婦養成が進められたことを背景に、日本においても1880年代以降いくつかのミッションは看護婦資格を有した宣教師を日本に派遣し、看護教育を開始した。1880年代から1890年代では、日本で初めて体系的な看護教育を実施したリードやナイチンゲール式看護を導入したショーらが活躍したが、初期の看護教育は長続きしなかった。しかし、「東京府看護婦規則」(1900年)、「看護婦規則」(1915年)などを通じて専門看護婦の地位が確立するにつれ、ミッションによる看護教育も発展していく。1900年に来日したアメリカ聖公会のトイスラーは、荒川イヨの協力を得ながら精力的に看護婦養成を行った。1920年には聖路加高等看護婦学校が設立され、公衆衛生看護の教育・実践が日本にもたらされた。筆者は、この時期のミッション看護学校は、クリスチャン(ないしキリスト教への理解がある者)にたいして、看護婦という新たな職業選択の可能性を

与えることが目指されたと述べる。

第6章、第7章では、大局的には医療宣教が下火になる1900年以降、日本の医療との差別化を図ることで医療宣教の意義を積極的に示したセブンスデー・アドベンチスト教会とアメリカ聖公会の活動が分析される。セブンスデー・アドベンチスト教会はキリストの再臨と第七日安息日礼拝という教義を柱とするプロテスタント教派である。同教会の規模は必ずしも大きくなかったものの、日本人向けの神戸衛生院の開院(1903年)や、戦時下においても経営が継続された東京衛生病院の開院(1929年)などを通じて、医療宣教による受浸者を獲得していった。筆者は、セブンスデー・アドベンチスト教会が医療宣教を発展させることができた要因として、(1)同教会が医療宣教を伝道の補助ではなくその中心に位置づけていたこと、(2)日本人医師が化学・薬物療法を発展させるのに対し、同教会は物理療法が薬物療法を補完すると提示することで、患者からの支持を得ようとしたことの2点を挙げている。一方、アメリカ聖公会が活発に活動できたのは、聖路加病院を設立したトイスラーの貢献が大きかった。彼はこれまでの医療宣教の特徴を踏襲しつつも、聖路加病院に日本の病院に欠如している特徴を付与することで、宣教に意義を与え続けようとした。その一つ目は、同病院を国際病院化することだった。この計画は、日米親善・国際平和に貢献すると考えたアメリカ側と、医術水準の高さを海外に示そうとした日本側の双方から協力を得ることができた。二つ目は、公衆事業を発展させることだった。トイスラーは、日本の理論医学は欧米に遜色ない一方、臨床医学は十分発展していないと判断し、公衆衛生・予防医学を振興するために同病院をメディカルセンターとしてつくりあげた。以上のように、セブンスデー・アドベンチスト教会とアメリカ聖公会は、日本ではまだ不十分である分野に訴えることによって、20世紀以降も宣教活動を発展させることに成功したと述べられる。

第8章では、戦後にGHQ/SCAPの公衆衛生福祉部(PHW)がドイツ式からアメリカ式へと医療を改革する過程において、聖路加病院や同院長の橋本寛敏らが果たした役割が論じられる。終戦直後、聖路加病院はアメリカ式の病院として発展していたためにアメリカ陸軍に接収されたものの、その後の医療改革における病院、医師卒後研修、看護の3つの分野で模範的な役割を果たしていっ

た。本章の論点の一つは、先行研究で指摘されるように戦後の医療改革が厚生省など政府からのトップダウンで進められたというよりも、むしろ民間との協力関係の上で進められてきたというものである。筆者は戦後に刊行された医学雑誌上の論稿をはじめとする資料を丹念に分析することで、上記の点を明らかにしている。

前章で聖路加病院を戦後医学史上に位置づける上で、第9章においては、その他の病院を含め、戦後において実際どのように医療宣教が進められたのかが明らかにされる。戦時中に行われたキリスト教への取り締まりの緩和および、朝鮮・中国での政治的不安の背景として、東京衛生病院などの既存のミッション病院が発展したことに加え、日本バプテスト病院(1955年)、淀川キリスト教病院(1956年)といった新教派の病院が新設された。戦後のミッション病院では、慈善医療や看護養成の推進という戦前との共通点も見られるが、戦後日本で十分に発展していなかった新生児医療、終末期医療を進め、他の病院との差別化を図ろうとする独自性があった。さらに、医療ソーシャルワーカー、病院管理者、栄養士、病院ボランティアなどの多様な医療専門職が協働する「チーム医療」を進めた点も戦後の大きな特徴だった。それに伴い、牧師も臨床訓練を受けた牧会カウンセラーとして専門職化し、病院ボランティアを含む病院のクリスチャン職員と協働して患者の霊的な苦痛を取り除こうとする「チーム宣教」が推進された。

本書は、アメリカ人医療宣教師の全体像を初めて提示したものである。そして、医学史、ミッション史の両方の先行研究においてこれまで十分に注目されてこなかった医療宣教師を対象とすることで、それぞれの分野に大きな貢献をしていると思われる。すなわち、従来ドイツ式医学の導入に注目してきた医学史においては、アメリカ人医療宣教師が日本の医学教育・実践に与えた影響が明らかにされ、また医療宣教が副次的なものとして扱われてきたミッション史においては、彼らのドア・オープナーとしての役割が縮小した後の活動まで含めた全体像が示されている。しかし、いずれも専門としない評者のような読者にとっても注目されるのは、第4章、第5章を中心とした女性医療専門職の取り扱いではないかと思われる。例えば第4章では女性医療宣教師に着眼することで、医療宣教の意義が弱まる1880年代においても、女性や子どもといった当

時十分に医療が届いていない患者層への宣教を試みる姿や、医学を学ぶ機会が限定的だった日本人女性たちをアメリカに留学させていた姿が丹念に描かれている。さらに第9章では、女性医療宣教師、看護師のみならず、医療ソーシャルワーカー、病院管理者、栄養士として活躍していた女性たちが取り上げられる。資料の制約などからも十分な記述がなされない傾向にある女性たちが、さまざまな次元において重要な働きかけをしていたというように歴史を垣間見ることが可能であり、またそのような視点を持つ必要があるということを再認識させられる本である。